

《夢日記》～‘私なるもの’のメモワール～

山上 千鶴子

■序言；

「夢思考」とは、‘私なるもの’の萌芽である。そもそも「知ってて知らない、知らないで知ってる」無自覚な自分がいる。そこから、「(私が私を)知る」自覚なるものが自己意識(主体)に捉えられてゆく。この「覚知」こそが、‘私なるもの’の証しの眼目。こうした‘個’に固有な自らを証しせんとする本性、即ち〈自証的覚知〉の発展の軌跡を、己自身の書き残した過去の夢の記録から辿ってゆけるのではないかと、ここにその道筋の素描を試みた。

夢内容とは、まず原初的には感覚刺激の残滓である。‘意味’は剥離したまま。つまり無内容。そもそも自他の区別もない。外界のイメージに付着して、それに同一化するといいた‘私なるもの’の前駆的状況。それらはバラバラに浮遊し、くっ付いたり剥がれたり、とりとめもない散乱状態。まるで‘暴れ凧’みたいに、手の内に掴んだ凧糸をいくら手繰り寄せようとしても、凧は空中でただ風に煽られて暴れまわっているだけで、うまく操れないにも似て・・。

こうした場合、「今・この自分」は時間的にも場所的にも規定されない。つまり無時間・無場所。振り込まれた感覚的イメージは、意味を包容する‘表象’とはならないし、記憶されない。意識をすり抜けて、やがて忘却の淵へと追いやられるだけ。‘暴れ凧’がやがて‘糸の切れた凧’となって跡形もなく姿を消すように・・。即ち、「私なるもの」へと収斂されてゆかない。私を映すものともならないし、自覚にも何ら繋がらない。ただ呆然と赤子が外界の光・音・かたちに反応するときのように・・。未だ感知され得ないものとしてあるばかり。

だが、それら感覚対象はやがて‘応答可能’な他在的存在となり、そこから「主体」は目覚めてゆく。赤子のコンタクト(触れたい!)という内なる衝動に促されて・・。いつしか掴みどころのなかったそれらが幾らか取っ掛かりとなる。自己が自己を解ってゆかための‘機縁’として・・。心が引っ付く(付着する)のだ。ぬいぐるみだろうとタオルだろうと。そして勿論、ママもパパも、ジイジもバアバだって・・。愛着が生まれる。心がしっかりと掴んで離さない。それらが‘私なるもの’との因縁に結ばれてゆく。例えばオーボール1個にしよ、赤子はちゃんと選んで‘私のお気に入り’にしてるってこと！俄然意志の能動がさんざめく。それが「私が在る」という現実を確かなものにしてゆく。斯くて、緩やかに自己の確信へと近づく。

やがて「主体」は受動に飽き足らず、どんどん自己意識を募らせ、感覚的イメージを‘意味’の包容された表象として使い始める。それらは「私なるもの」の核へと収斂され、凝集され、いっそう「私なるもの」の生成を促す。そして、それはもはやカオスではなく、目的と方向をもつ自律的な‘動き’を胚胎してゆく。煎じ詰めれば、われわれ人間は外界を絶えず

意味づけんとする(Feeding Interpretation)存在なのであり、わが心とは、生涯を賭けて、それら‘結実’を、わが想いを是非にも謳わんとする。即ち、「自らを証しする」ということこそが自己意識の眼目であり、つまり夢というのは、まずはそうした心の内なる営み、「自己劇化」の舞台といていい。目覚めた観客としての私が、それに応答する。自己に於いて自己を映す鏡として…。ここに生まれる‘対話性’が、自己覚知ということになろう。遙か彼方の手の届かぬ深層の無意識が自己の意識に繋がる。その手応え！夢とは斯くもおもしろきもの。この‘風揚げ’の感覚に興じたい。

■1980年代頃：〔『ダイアリー』に夢のメモ書きが散見される。それら一部を抜粋し掲載する。〕

【解説】；おっかなびっくり自分の‘内側’を覗く。アンタゴニズムの渦巻き。心的内界の渦中に棹さし、その先に引っ掛かって、一瞬にして垣間見られた心象風景の片鱗あれやこれや…。私の‘生’の証拠物件。あれも私。これも私。とんでもないシロモノ。これが正真正銘の私！そして真実それら夢の中に、確かに「私の生」が脈々とフォルムを描くのを見た！

※1982年7月1日；

《夢：鉢植え。プラントが埋められている。何も花は咲かない。死に顔がその濡れた土の上に浮かぶ。男。扉の外。血塗れで背を向けた恰好で立っている。風体の悪い男。黒の印象。倒れる。…別の男。探偵か？？「尋ね人」の協力を求められ、電車に乗り込む。》

◆追加メモ：悲しい気分。ポオーと虚ろな部分あり。ああ、鬼ごっこ、追い掛けごっこはしたくない！…人間ちよつとした食い違いで、出会いがあったり、なかったり…。ただそれを掴むか離すかは、私次第。自分はどこにいるのか、誰といるのか、選ぶのは私。私は、自分の運命を選び取りたい。

※1983年2月18日；

《夢：キャベツ畑の中へ入ってゆく。コンクリートの水路。水が流れている。そこに浸かる。男の子に襲われる。水の中で、濡れた手拭いで首を絞められそうになる。危うく、難を逃れる。》

◆追加メモ：＜必要とされたい！あの人には自分がいなくては…＞という罠に嵌まった自分。この罠から逃げること、自分を解き放すこと。必要とされないといライラして、‘親切の押し売り’の餌をばら撒く、あっちこっちに…。＜春の臨床セミナー＞のご案内を20名ほどに郵送。押し売りの懸念。無視されて、それで疎外感に耐えるのも容易じゃない。生き残りに苦戦している？？被害的になってるのかしら？？それで、‘仮想敵’を捏造しているのか？！

※1983年9月9日；

《夢：水槽の中に、後から入れた魚が前の魚を喰っている。魚が消えている。(底には蟹がいる。)生き残ってるのはメダカらしい？？繁殖力が旺盛だからか？？》

◆追加メモ:この日、アダムズ夫妻がカナダへと出発。見送りに行った。

◆考察:Mrs. Takanolに引き続き、Mr. Kataiの分析打ち切り。どちらも中途半端な終わり方。それで不快感あるいは挫折感をひきずってるわけか。臨床家としての動揺。疲労感募る。

※1985年4月30日;

《夢:誰かの個展の会場か。彫刻家・小林康彦氏と一緒に。一つひとつの作品の中に「文法」を見ることを話している。興味出る。……外に出る。デパート。入り口と出口とがつかない。電車の乗場を探す。》

◆追加メモ(5/14記):押し退ける・押し退けられることを回避。人(相手)を‘力ある者’にするために、自分が‘力ない者’になる。逆に、自分が‘力ある者’になるために、相手(人)を‘力ない者’にする。自分の本領は曖昧なまま。本領の発揮されるプロセスが途絶える。

◆考察(5/27記):部屋に飾ってある『市松人形さん』が傾いているのが何故か気になり、ふと思いついて着物の裾から手を入れると、突っかい棒があって、それを指先でいじると、何と人形さんの背骨がシャンとなった!まるで奇跡!どうしてこれ迄、5年もの間それを傾いたままに放置していたのか、不思議なぐらい。万事手出しするのを怖がっている。私って、なんという‘手無し娘’!

※1989年8月30日;

《夢:夫婦のカップル。男性の避妊手術。》

◆追加メモ:不安発作。被害妄想(妊娠不安)。焦躁感。孤立感。誰にも助けてもらえない。誰にも何してあげたくない。→無能感。・・・「渋谷区中央図書館」で『高橋たかこ』の著作を何冊か借りる。<装いせよ、わが魂よ。遠く苦悩の谷を歩いている時。・・>。

■1990年代頃:〔フロッピーに保存された膨大な量の夢の記録。そのごく一部を抜粋し掲載。〕
【解説】;ワープロ機を購入。夢が浮き彫りにする、折々の自分の気持ちの襞を読む。微に入り細に穿つといった調子。それら連想を気の赴くままバンバン言葉に打ち付けてゆく。自分の気持ちが分かる分かるって、フォローできる。頷く。時折、驚愕したり、違和感も勿論あり。だが自分にじっくり付き合える感触。自分に向き合っている。内なる‘応答性’が募ってゆく。自分が自分に呼び掛ける‘声’が聞こえてくる。殊に「半覚醒夢」が興味をそそる。夢うつつに‘心象(イメージ)’が、そして脈絡なしに‘言葉’がふいと訪れる。心の内に喚起されたそれらを媒介に、それ自体がさまざまに変容を遂げる中で、やがて私の「思考」は物語(ミュートス)を紡ぎ始める。グイグイと自分の背中を押す。自分に言わせてみようとする。堂々と論陣を張るといったふうに。自意識の高まり。夢なるものの「自己劇化」にいいよ弾みが付く。

※1990年2月16日(金曜日);

《夢;山間の村落。誰か男の人を訪ねて行った(?)。遙か彼方傾斜したところで泥炭(ピート)を掘っているらしい男の姿が見える。やがてその彼は、私の傍らで庭の植物を植木鉢に移植して私に手渡してくれる。花が一つも付いてないので、少々がっかりする。そして辺りを見渡すと、夕顔の花のような薄青色がかかった白っぽい花がいっぱい咲いている。光溢れる思い。》

◆考察;この夢の中の男とは、まず最初に連想として浮かんだのがDr.メルツァーで、何故ならいつぞや彼からの手紙のなかに確か、私が今後携わってゆく仕事の分野(フィールド)が稔り豊かなことを祈ると書かれてあったと記憶しているから。またその男が、Mr.ジョン・ブレンナーであってもおかしくない。つい最近のテレビの放映で、英国において泥炭が燃料として暖炉で使われているのが紹介されたが、その折り、男が泥炭地でピートをシャベルで真四角に一つ一つ削り取りながら、このピートは10年に5センチ程度しか堆積しないと説明していたのが深く印象に刻まれた。今にしてようやく「フロイト」を本腰入れて読み始めているが、今世紀初頭以来数知れぬ多くの人々に語り継がれて来た知識や洞察がどうやら私の経験につながって私の中で息を吹き返した如き感がする。男性コンプレックスの雪解けか。羨望ではなく、正しく憧憬を抱くことは、光に導かれることを意味すると感慨を得た。

※1990年4月30日(月曜日);

《夢(於;膳所。休暇中);私の原宿の部屋。木製の四角い鳥籠が置いてある。籠の中には白っぽい岩があって、そこには雑草(小松菜?)が生えている。だから‘餌’は大丈夫だろうと思うが、どうも空間が狭くて鳥が飛べないのではと心配する。そこで岩をどけようとする。一面白い砂地。砂の中から貝殻が3枚ほど出て来る。鳥が1羽ひっくり返って死んでいる。もう1羽はと見ると弱りかけで、そしてもう1羽も…。結局のところ全滅か。》

◆連想:‘終末観’漂う。NHK大河ドラマ「翔ぶが如く」、西郷吉之助が奄美大島に置き去りにせざるを得なかった愛加那と息子→私の患者たち、自給自足の限界、そして破綻。

※1990年10月11日;

《夢:小高い丘の上に同窓会で皆と集まっているらしい様子。全体に地面が黒っぽい、寒々しい風景といった印象。阿見小学校時代に可愛がってくれた日沢先生(男)が傍らにいて、丘を越えた向こうに私を連れて行こうと誘うが、もう一つ私は気が乗らず、渋っている。すると、私を腕に抱き上げて、丘の向こうを覗かせようとする。後方の丘の上に白いビルディングが建っている。(変哲もない印象で、後でどこか『タビストック・センター』を連想。)まるで子供が‘高い高いされている’みたいな状態でしばらく経ち、多少の抵抗を覚えながらも、言われた通りの方角を見ると、深々とした水を湛えた湖が展望された。幾筋かの滝から、水がその湖へと流れ落ちるのが遠景に見渡される。

それは、途方も無く深遠な趣きがあって心撃たれる思いがした。興奮して、周囲にいた同級生らしき子にくあれを私たちは見たことがあったんだ！>と言う。すると、先生が側から古い言葉ではなく、新しい言葉を使うように>と、私に注意する。それから何人かの友らと連れ立って、丘の斜面を下降する。程ない距離のところ販売店らしき建物があって、そこへ人々が群れをなして集まってくる。ふと見ると、‘呼び物’なのか猿が何匹かそこにいる。4匹ほどそれぞれが一つの杭を真ん中にして片腕を上げる恰好のまま、手首を枷でつながれている。何故首枷じゃないのか、そうしたら両手で餌を食べれるだろうにと不審やら不快を覚える。その場を去り、元の道へ幾人かと連れ立って戻る。その途中の、雑踏とは格子戸一枚隔てた道端。明るい日差しの中に、紙で出来た折り鶴(あるいは蝶々かも・・)が2羽、白い羽根をヒラヒラさせながら舞っているのをガラス越しに目にした。飽くまでもそれは‘雄・雌一対’だという思い入れを勝手に抱き、感慨深い印象を残す。

◆連想：湖について、あれこれ思い浮かべ、最終的に「チチカカ湖」という名に辿り着く。つまり父・母・子ということか！タビストック・ファミリーとも関連しているかも知れない。特に、誰かの鼻疽の対象になっている自分が、改めて興奮を伴い思い起こされたことが懐かしい。‘申し子’という言葉の重み。かつて自分がさまざまな人の期待を担っていた、さまざまな土地でのさまざまな時期の記憶が重なる。土産物屋に見世物の猿がいたのは、先日の『日本ホリスティック協会』主催のシンポジウムで「河合隼雄」が列席者の一人であり、彼をその昔タタラ先生が、‘猿回しの猿’と称したことが記憶に残っていたことと関連する。いかにも片手間で心理臨床しているといった印象で、彼に対して失望と侮蔑感あり。そうだ、志を高く持つことだと、夢が私の迷い・憂さを吹き飛ばしてくれたような、そんな痛快さが目覚めたあとに味わわれた。結構、父親に‘高い高いされて興奮し、大喜びする赤子’になれたことが、ご機嫌なのかも知れないけれども・・。一対の鶴(あるいは蝶)は、父のことなど普段は滅多に念頭に過ぎることにはないのに、意外と執拗にしかも楽天的に夢見る自分がいる。もしかして、ここ3日連続の「飯田善國」の解説によるNHKセミナー「ヘンリー・モア」の放映が興味深く印象に刻まれていて、それがこの夢の背景なのかも知れない。これ迄多くの幼な子イエス・キリストと聖マリア像を見たが、さほど喚起力を自分の中に体験として認めたことは未だ例がなく、だがヘンリー・モアの母子像は何かしら心の平安にとって根源的な充足を喚起する力があると認めざるを得ない。これがまさしく、Dr.メルツァーの言うところの‘芸術’なのだということを改めて実感した。確かに、今日の最終回で語られたように、彼の芸術は‘生への希望’の証なのだ。》

※1991年8月12日(月曜日)；

《夢7：早朝9時、呼び出しを受けて、出向く。定刻まで、隣の空いている部屋で椅子に腰掛けて待っている。まるでタビストックで、マーガレット・ラスティンとの面談を予定しているかの如き雰囲気。ところが、いざ会ってみると、その相手は、シスターの校長さまで、床に仰向けになった恰好でいる。白いヴェールを被り、修道服姿。もう一人女生徒らしき姿あり。その人に向かって、彼女が私のこ

とをくこの人はクセモノだけど、(生徒に)人気はあるでしょうねえ>とか噂する。この間、私は何故か顔のニキビを気にしている。外へ出ながら、からだの凹凸はあるべくしてあった方がいいなどと(つまりは肥満を警戒?)考えている。ビルの入り口に差し掛かり、両脇にまるでお正月の門松みたいに立派な、背丈ほどもある鉢植が2つ置いてある。青々した植物を見て、<これ生き返ったわね・・・>と、傍らの誰かと話している。校長さまとの話の背景に、私が教職を得て、どこかへ赴任する予定らしいことが伺えるのだが。夢の最後、実際には私は教員免許など持っていないわけだから、残念な気が微かにした。》

◆考察: Mrs. ハリスが私の帰国に当たって、<パイオニアになるんですね>というコメントをしたのであったことがふと記憶に蘇る。そういうあちらの期待、そして自分の気負いが、その当時でもどこか疑いがなかったわけではないが、今ではもうそれは跡形も無い。‘いい子’にはなれなかったという面映ゆさばかり。事実、教育分析への道は遮断されているのも同然で、それは誰しも国際精神分析学会の会員を将来めざすのが常套手段であるからして止むを得ないのだが。要するに、状況的に力及ばずでしかないという言い訳もある。だが、どうも昔から‘いい子’にされてしまうことへ奇妙な警戒心が働いていた覚えがある。それかな?? それでいて、そうしながらも、どこかで担わされたものを決して背から降ろすところまでは行かない。そこら辺の迷い故に、母親宛に彼の地で書き綴って送ったかつての手紙類を10年経った今でも一切開くことが出来ずにいるのだろう。

帰国した当時、あちこちから頻りに講演(あるいは対談)の依頼があったが、総て時期尚早と断ってきたのは、どこかで自分の傷口に他人を触れさせる、もしくは嘗めさせることを潔しとしない自分がいたからだろうと思う。本当に自分の身に何が起きたのか、今それをどう自分の中で引き継いでいるかを整理しないままに、人前で感情の垂れ流しをしてしまうことは、おぞましい。癒される必要が自分の中に真実あるとして、その癒される作業を自分以外の誰かに軽はずみに肩代わりさせていいものではない。私個人の場合殊更に、精神分析家としての気概がそれを許さない。悲愴がる自分が人の眼に滑稽に映ることだけは止めねばと戒しめる自分がいて、更には何が自分にとって擁護すべきものであるかを見極め、だからそうした闘いの過程で真実‘敵’は何で誰でと悟る迄はうっかり口も開けないという政治的配慮もあったわけで・・・。

※1991年8月13日(火曜日);

《覚醒夢2: [夢1をザッとメモ書きしてから、また寝床に横たわった時点で、パッと目の前に浮かんだ光景!] トマト畑。トマトが枝にたわわに実っていて、それら鈴なりのトマトの総てがではないにしろ、真っ赤に熟れたのが比較的多くあって盛観。その傍らに私が立って、まるで記念写真を撮って貰ってでもいるような一瞬である。》

◆連想: いつか講演で見たスライド写真。「水耕栽培」の成果、鈴なりのメロンのお化けの樹。流通機構の観点から見て、今後それがどれだけ普及されてゆくかは心もと無いにしても、野菜・果物

づくりの既成概念を根底から覆す革命的な事実が今既に実現しているのを目の当りにして大いに感激した記憶がある。そして、発表者の(株)協和の社長がいかにも朴訥な技術畑を地道に歩んできた人の謙虚さがあって、それも感動的であったが、それで今後採算ベースに乗せられるかどうかを度外視して、心躍る事実立ち会っているという自負なり熱狂が微かに感じられて、幸せな人でもあるとの印象を抱いたのであったけど、私もそういう人になりたい！トマト畑での記念写真とは、こしばらく休みの間、過去10年ほどの日誌を整理して、症例の記録をまとめようと、日誌を押し入れから引っ張り出したこととも関連する。いよいよ収穫の時来たれり！..なのかしら？

※1991年8月18日(日曜日)；

《夢4:ロンドンの風景らしい。「ゴールドズ・グリーン」の町並み。私はどこにいたのか、何を見たのか。どうしてそこにいたのか。混沌。脳みそをまるで熊手で引っ掻き回すような気分。そう言えば、或日本人ご夫婦のお住まいを訪ねたことがあった。お名前が一向に浮かばない。その辺りの住宅地を一人で散策しているらしい。人影なし。それは一度つきりしか訪れていない土地らしい。どこもここも、一度つきりで素通りした地ばかり。戻っても、何もない！という虚ろな感情。木があって、庭があって、家々があって..、私は今迄想い出すこともないままに、彼の地の記憶の片鱗が風化するに任せてきた。けれど、確かにそれはその通りそこにあったに違いないし、又そのままに今もあるのかも知れないという気がふとした。

◆連想:どこで見たのだったか、「清水アキラ」とその兄が20年ぶりに幼年期を過ごした山口県の片田舎に戻ってみる。そして、もはや誰もいなくなった、何もかもなくなったという感慨を強める。そして<残っているものとは？>と自ら問うというもの。さて、「ゴールドズ・グリーン」と言えば、タタラ先生と一緒にフロイトの墓参りに墓地を訪ね、それが見付かるまで随分手間取った記憶がある。そして忘れていたけれど、マーガレット・ラスティンの娘さんに学校でJAPANについて学ぶ授業の参考資料として差し上げた「日本のもの」、和紙類とか、和紙で出来た人形など、今でもあるかも知れない。更に、彼女の家の居間の確かピアノの上に私から贈り物として差し上げた若狭塗りのお盆が今でもそのままに飾ってあるかも知れない。気付かないで、私の形見、足跡が残されてある、あちこちに..。つまり、自分はすっかり忘れていたつもりでも、誰かが私を今でも時折思い出してくれたりしているのかも知れないという気持ちが沸いた。「人の心の中に記憶されている自分がいる」ということを、今迄大して重大に考えていなかった嫌いがある！どうしてなのか？！他人にどう思われようともまるで頓着しないほどに、タフな神経で生きてきたつもりでもないのだが..。

或いは、先日読んだ詩人「鮎川信夫」の文章・「反省をたのしむ」ということか。自分とは無縁でしかない、でも生きている誰彼に対して、関わりの余地を残すということ、それを彼は語っている。それで、結構自分という人間は‘穴ぼこだらけ’なんだなあといった感想を抱いた。さまざまな、そこそこで出逢った人達を記憶の‘墳墓’の中に葬ってきた自分がある。そして、<誰の中にも私

はいない>と絶望する！それで思うのは、<人間は、自由は、あの地にしかなかった・・・>と、シベリア抑留の凍り付いた時間に自らを縛り、「今」に頑なに背を向けたままで生きた詩人「石原吉郎」のこと。生きて戻ってきた自分の‘恥ずかしさ’に復讐するごとく耐えた単独者の彼。「鮎川信夫」と「石原吉郎」の違いがどこにあったか、どちらも個人的経歴をつまびらかにしようとならないので、推測の域を出ないが、「鮎川」には終生母親との必然的な関わりがあり、そして「石原」には肉親の縁に薄いといった印象が紛れもなくあって、つまり<誰かの中に自分がいつもいる>と、多少のうっとうしさを感じながらも、それを当然視できる人と、<誰の中にももはや自分はいない>と断念するしかない人との生きざまの違いが想定される。それが他人の作品を評論する人とならない人にも又分かれる所以であるかも知れない。更には、最後の死に方にしても、甥の家で家族と一緒にテレビゲームに戯れている最中ポックリ行った人と、一人湯槽で死んでいた人との違い。しかし、「石原吉郎」があらゆる破綻を味わい、錯乱状態に陥り、妻の方も神経症を患い、入退院を繰り返すといった地獄絵さながらの晩年を送らざるを得なかったことをどう考えるか。部外者の誰にも事の顛末は決して与かり知らぬものとは言え、どこか<誰の中にも自分がない>という飢餓地獄に自らそしてついでに配偶者もが嵌まったかな。‘復讐の鬼(思い知らせてやる！)’になるしかそこからの脱出口はなかったかな。しかしどこにも敵などいなくて、自分の復讐の刃を受けざるを得ない相手とは、本来自分の愛した妻以外誰もいなかったということなのかしら。

※1992年2月19日；

《夢：畳みの部屋。Dr.磯田雄二郎先生と向かい合っている。個別スーパーヴィジョンなのか。彼の傍らに彼が持ち込んだ荷物があつた。大きな三角条規。他に木製の三脚らしきものが眼に止まる。画架なのかとふと思ったが、土木計量器具かと訊く。或いはそのようだと合点する。肝心の個別スーパーヴィジョンといえば、畳みの上にタイプした資料やら新聞紙やらが乱雑に散らかっている。資料を用意して来なかったのか、そういう取り決めになっていたのか、自分の資料を提示するようだ。後はゴチャゴチャ・・・。》

◆考察：大きな三角条規が目立ったが、ここで「規律」が連想された。最近、《ウエルナー(Heinz Werner)》の『発達心理学入門』を読み始めている。意外な程、面白い。いよいよ総括の時期と思い、テレビを極力見ないようにと決めている。理論武装という言葉は嫌いだが、『理論』あるいは『概念』があるお陰で、ああそうだったのかとじっくりまとまり良く収まるのが結構ある。思い付きに酔うのではなく、一人合点ではなく、裏付けが必要。生の資料をどこからどう読んでゆけばいいのか、骨組から肉付けしてゆく過程を詳細に逐一跡付ける必要を感じる。自己流でやれるだけやりたかったのもこれ迄はいいが、そろそろここに来て、先達の業績から学ぶことを始めなければならない。それは、自分に対して如何に客観的で有り得るか、また今後自分を如何に他人と共有させ得るかの目安にもなるから。自分のやってることに自分が自分でも解らないでは収まらないわけで・・・。

他人にも解らせるといったことには熱意が今一つ燃えないのは、何故だろうか。どうも自分一人が突出して目立っている場にいたいのかしら。‘面倒見がいい’と言われるところからは程遠いところに自分がある。利用したり・利用されたり、踊らせたり・踊らせられたりなど真っ平御免という潔癖感が自分を尻すぼみで終わらせてしまうのかという危惧があるものの、それだからと言って、発奮する気持ちにもなれない。唯一つ、他人のお世話はさておいて、自分の荒削りで、きちんと帳尻合わせをしない、だらしなさは問題だ。何としても、この我が身の咎は払拭しなくてはなるまい。

※1992年4月29日(水曜日)；

《夢：白いバンで田舎を走っている。外国らしい田園風景。あちこち、見知らぬ道に入り込み、元来た道をバックしている。通りがかりに、白い二階建ての潇洒な家。ガラス張りのせいか裏側のキッチンの様子が丸見え。若い女の子の姿が見える。間もなく、その家の誰かと誰かが知り合いだとかで、私も一緒にあがりこむ。留学してきているらしい女の子が共同で住んでいるらしい。アーティストなのか、それぞれの作品を披露しているみたい。私は、その家の外に出て、カメラで辺りの景色を撮ろうとする。しばらく歩くと、駅があって、赤レンガ色の建物が並んでいたり、その左端にカメラを向けると、一面芝生が広がって、池もある公園になっている。遠景の教会をバックに、これは絵になると、勇んでカメラを構えてシャッターを押す。ところが、シャッターが降りない。慌てて、ガチャガチャとカメラの機体をいじるが、埒が明かない。その内、辺りに人が群れて、カメラの画面が景色だけではなくて、人があちこちに入り乱れる。まあそれもいいかと急いでシャッターを押すが、やはりダメ。急遽近くの店に飛び込み、カメラが故障したのかと、そのオヤジさんに訊く。すると、フィルムが終わっているのだと言う。そう言われれば、機体の裏の表示数は21になっている。しかし24枚撮りのフィルムの筈ではなかったのかと、怪訝な面持ち。いつものメーカーとは違う何か安物のフィルムだったらしい。オヤジさんが、フィルムを巻戻してくれて、新しいのと交換してくれている。安堵。》

◆連想：21でフィルムが終わったのは、昨夜Dr.メルツァーの『自閉症世界の探求』の本を読んでいる、最後のConclusionのところを残して寝たことと関係ある??

◆追記：昨日、図書館に行くのに、軽い方の腕時計をしていたら、それが止まっているのに気付く。これ安物だから壊れたのだと思って、棄てるしかないかと思った。でも考えて見れば、電池交換したのは随分昔だから、電池が切れていてもおかしくはないわけで、今朝目覚めて、新聞を読みながら、電池を入れればいいのだ、時計そのものが壊れているわけではない筈と思い直した。これと夢とが、後で関係づけられた。それとこの頃元気がない。このまま先細りになるのではという不安が一瞬過ぎた。その不安とは別個に、どうも仕事に飽きたという感じも否めない。何かハレバレッとしない。そろそろ「巻き返し(巻戻し)を図る」時期なのかとも思うが・・・いよいよ本格的に理論構築の時期に入ったといていいのだろうが、自分が経験的に考えていたことが、結構かつてのあの人の人のお陰であったようなことだと改めて自覚され、まあ、私が私かと天下を取った気分みたいな興奮が

冷めてみれば、ナンダで尻すぼみなのかという危惧あり。臨床のケースは、これやあれやが、自分にとって本当に解った！というところに至るまでに、是非とも必要なわけで、そういうものなんだと自分に言い聞かせながらも、いつになったら私にはこれが解ったと自分の独自性を世に問えるのかという思いが、自分を窮屈に息苦しくさせている。若輩の身で、結構生意気だった自分がいて、自分が納得しなければ頑固にそれを受け入れないのはいいとして、唯それは違う！だけでは引込みが付かない。そんな焦躁感で、くたびれているのかも知れない。ああ、のんびり鷹揚に構えてやれないものか。そう言えば、自分が誰かに指導され教える立場にいることの幸せを、あまり私はしっかり味わうことなく来たのではなかったか。Dr.メルツァーが何かそのようなことを言ってなかったかしら。かつてメラニー・クラインなどの先輩から指導を受けていた頃が一番張り合いがあったとか、症例にしても一番熱が入っていて、記憶に鮮明にあるんだとか。むしろ私の場合、自分の思い通りに考えられる、そんな自由に憧れる気分が優勢で、どこか教えられることにうとうしさを感じる嫌いがなくもなかったわけで。かつての「自分が教えられた以上の何かになりたい」という野心が、今更にして、無謀というのではなくても、どちらかと言うと、傲慢であると悟らせられるというのは辛い。しかし、思い直して見れば、これは改めて‘充電の時期’であるわけで、<これでおしまい>ではなくて、<まだアル！>ことをどう信じられるかであろう。拒んでいるのが、向こうではなくて、不遜極まりない自分の側だとすれば、今後の有り様にも改めて方向を見定められはしないか。やっとそろそろ、あれは何だったのかを知るために、‘昔に立ち還る’だけの気概が出てきたと思いたい。

※1992年5月12日(火曜日)；

◆考察；最近、頓に鬱的な気分が密かに案じられていた。休暇中は両親を相手に、努めて明るく振る舞い、決して心配させるような材料を口にする事はなかった。だが、内心いよいよ先細りかという思いあり。クリニックの問い合わせ件数が極端に少なくなっている。みぞおちの辺りに、変な深い落ち込みが。疲れ・倦怠感、もっと言えば干からびた感情が募ってゆくような、厭な予感あり。

先週の土曜日に、『日本心理臨床学会大会』実行委員会から、ある事例発表の座長の依頼が届いた。今までこうした機会がなかったのが不思議なぐらいだが、そう言えば心理臨床学会入会及び資格登録もついこの間のことであり、こうした集団にむしろ愛想をしてこなかった私の側に咎があるのであって、呼び掛けしてこない向こうに咎があるわけでもない。俄然、今起ころうとしている巡り合わせに便乗することにした。九月の大会までに、大衆の前で自分を披露するに恥ずかしくないだけの準備をしなくては。一体私は何なのか、誰なのか。知らせるいい機会であろうが、一体私は誰で、何だったのか。

それで改めて私は誰で何だったのかを知るために、昨日私がロンドンから両親に送った手紙類を紐解いた。今まで、その箱を開けることが、まるで金縛りにでもあったかのような抵抗があって、出来なかった。たくさんの不義理を重ねたような、若気の至りというか、その当時懸命ではあったろ

うが、決して誉められる自分じゃなかったという思いが優勢だったと思う。幾つか読んでみると、相当勢いが良かった、かつての自分が彷彿とする。すっかり忘れていたが、親に度々金の無心をしているのには驚いた。でも、自分が思い描いている以上に、気後れとか罪やら羞恥やらを感じずに済む思いがした。後ろ脚で砂掛けて去ってきたわけでもなさそうだ。教えられた以上のものに自分になりたいと密かに野心を燃やしていたが、そうした気負いはまずいいとして、実際に彼の地での‘教え’が自分の中で十分に咀嚼も吸収もされずに未だいるといった反省を改めて抱いた。最近、Dr.メルツァーの著作を読んでいるが、これを日本で理解し、引き継ぐ者がいるとすれば自分しかいないのかということに突き当たり、やはりこれは何とかしなければという、気負いとも違う、一種の責任を覚えた。彼から私に将来翻訳をという依頼があったわけではないし、何ら約束をしてはいないわけで、自由に思っているわけなのだが・・・。

それにしても、昨夜奇妙な心境になった。久し振りに熱い涙が込み上げた。それは母親が年取って、気持ちが脆くなって、父親やら私ら子どもに縋りたい気持ちが募っていった姿と重なるが、その当時は唯々情けないぐらいにしか受け止めなかったと思うが、自分の前に人がどんどん姿を消し、自分が教えて貰ったり、励まされたり、叱られたりの‘子ども’ではもはやないということがどんなに辛いことか。Dr.メルツァーのメラニー・クラインへの想いにも重なるが、残された者として何かを始めなくてはなるまい。まるで孤児になったみたいで、捨てられた思いで嘆き悲しむよりも、すでに貰ったものがあると信じて、それを絶えさせずに生かすことに全力を尽くすことが残っている。そうした自覚しか、この危機を打開する道はなさそうだ。母親の状態を更年期障害だからと分かったつもりでいたけど、何も分かっていなかったのかと、我身に火の粉が降り懸かってみて、初めて分かったような・・・。「抑うつ態勢」という言葉はよく口にするが、自分がそこに至ってみて、嬉しいどころか、気弱で脆い自分でしかない我身は何とも情けない限りなのだが、みぞおちの辺りの干からびた感覚が幾らか薄れたとも言えるのは不思議だ。ハッキリなしに、このままの自分でいいという一種の安堵感から来る落ち着きののだろうか。

自分の力では及ばない、人の助けを借りなきゃ、どうにもならないと悟ることは、自分の脆さ・弱さを引き受けることを前提とするわけで、ここでの落ち着きとは、即ち＜助けを借りてもいいんだ、総て自分でやらなきゃならないわけでもないんだ＞という気持ちの納得が自分を自由に行っていることから来るとも言えようか。人生の折り返し地点、これで何とか乗り切れそうだ。

今日の午後、Dr.メルツァーの本に少し眼を通してから昼寝した。しばらく夏のような陽気であったのが、急激に気温が下がったこともあり、先日以来からだの調子を崩し、喉が痛む。喉が強烈に痛んで、眼が醒めた。夢を見ていたらしい。《夢：青年が一人、ボール遊びを路上でしている。白いバレーボールほどの大きさのを瓦屋根に投げ、落ちてきたのを捨てるという遊びを繰り返している。たまたま通り掛かった私に、その落ちてきた球が触れた。気をつけてやればいいのにと腹を立てる。間もなく、どこからともなく又々球が飛んできて、私の肩に当たった。遠くの方で男の子らの一群が

ボール遊びをしていたようだ。私は怒って、<もう危ないでしょ、人に当たったらどうするの！！>と小言を言っている。怒りついでに、その白いバレーボールほどの球を、金網越しに柵の向こう側へと投げ捨てる恰好をするが、威嚇のジェスチャーだけに止める。そこへ男の子らの一団から一人元気の良い、7、8才の男の子が飛び出して来て、物も言わずに、私の腕の中のボールに飛び付いて奪い取ろうとする。何もそうしなくても、返したのにと私は思っている。男の子が、それを両腕に抱えると、それがいつの間にか、2個の繋がった真ん丸い白いボールになっている。(お尻?!)その子と一緒に家路につく。そこは高い丘で、真向こうに海が眺められる。荒れ模様で、波が高いのが分かる。おかしなことに、自分が上半身裸なのを知る。いつの間にか、男の子の姿はない。右端の高台に住宅があり、そこに若い男の先生がいて、<そういうことだって、解っていたでしょ・・・>とか言う声が聞こえる。》目覚めながら、喉が頻りに痛むのと、Dr. メルツァーの翻訳は一人では手に負えない、誰か助っ人はいないかな、とあれこれ思い巡らしていた。実際、起きてみると、喉の痛みはそれほどでもなく、あのヒリヒリする強烈な痛みは何だったのかと訝しく思う。

※1992年9月27日(月曜日):(8月の末頃かと思うが、印象的な夢を見たので記しておく。)
《夢:背の高い、痩せ型の白髪の初老の男。上下青い作業着で身を包んだ外人。どうも交通整理をしていたらしい。通り過ぎりに、どうも気になって、振り返る。あちらもこちらを見ている。近寄る。<どこかで以前お眼にかかりましたか>と英語で訊くと、<いいえ>という返答。しばらくして、その外人はどうもドナルド・キーンのように(→Dr. ドナルド・メルツァー?)日本文化に造詣が深いらしく、あれこれ博識を披露する。私の知らないことをも知っているの、感心する。ある店(骨董屋)に立ち寄る。掛軸に何やら書が書いてあり(私の歌??)、判読不可能だが、光淋の字体にも似て魅了される。彼とその店の女主人が話している。(女主人は、女優・松阪慶子に似ている。彼とは懇意にしているらしい。)その彼には関係していた日本女性がいたとかで、どうしたという噂話となり、彼が、彼女には‘翼’がないと言う。つまり関係は終わったという意味らしい。》

◆考察;今朝、起きがけにあれこれつらつら考えごとをしていて、ふと思ったのだが、自分がずうっと「自分を導く者」を探していたんだという気がした。ここ20年来それを外側に求め、とりあえず既製のお仕着せのあれやこれやに準じることを余儀なくされてきたように思うが、それはそれで誰彼に大いに恩義を感じるのであるが、ここに至っては、それらのどれということではなくて、自分の内側に「自分を導く者」がいたような、その意味で‘探し物’が見付かった。そんな気がした。それが自分を導いており、それに従っていればいいという安心の思いが沸いた。それは昨夜、ハインツ・ウエルナーの『Symbol Formation(象徴形成)』を取り出して、ロンドンのタビストック時代以降、誰に強要されたわけでもないのに、延々とそれにこだわり続けたことの意味をしみじみと思ったことに由来しているのだが・・・もしもそれに自分が出会っていなかったなら、今のような自分にはなれなかったわけで、どこかではぐれてしまったかも知れず・・・危なかったー！という思いがする。自分をどこかで過つ

ことをしたかも知れず、そうしなくて済んだ一という安堵。それは必然か偶然か。いずれにしても、自分を導く者の力に自分が裏切られはしなかったと今思えるとすれば、掛け替えがない。

究極には、「己を正しく導く者」、そして「己に生きる糧を与え続ける者」を自分の内に見いだすことが、己を生へと駆り立てるものなのではあるまいか。一生を掛けて、人は、それらと自分との繋がりを見失うまい、はぐれまい、背かれまいとして生きているような気がする。それぞれに代償を払いつつも・・・。

※1993年1月17日；

《夢：Miss. ドーリン・ウエデル(D.Weddell)のオフィスらしい。私がベッドに横たわっている。自分の分析の時間なのかどうか臆に不安に感じている。そこへ誰かが来室する。そこで、やはり自分の時間じゃなかったのだと確信し、起き上がって、素早く去る。廊下の踊り場のようなところで、彼女の秘書らしき若い女性がいたので、時間を取り違えた(ミックス・アップした)とか、慌てて釈明している。・・・ジェットコースターに乗っていて、車体が急降下してゆく。眼下には繁華街が広がる。まるでディズニーランドのような賑わい。降りて、辺りを見回しているうちに、2つの手荷物のうちの一つは持っているものの、もう一つがない。座席に置き忘れたと気付く。振り返ると、ちょうどジェットコースターは引き返すところ。ああ、取り戻せないと慌てる。・・・しばらくして目覚め、ああ彼女は死んだんだと自分に言い聞かせる。》

◆連想：ジル・ドゥルーズの『差異と反復』という翻訳ものを読みながら、ああ私の「教育分析」も、まあ言ってみれば、ざあっとこんなものだったんだなあ感慨を新たに。つまり、どうにかこうにか解るとすれば、それは自分が既に解っていたことでしかなく、それもほんの僅かあるか無いかで、後の大部分は穴ぼこ(闇)だらけ。手探りで闇を引っ搔き回しても、皆目手応えなし。暗澹たる思い。最後には、ほとんど追い詰められ、どう考えたらいいのかではもはやなくて、(言語的コミュニケーションの域を越えて)どう感じたらいいのか(自己崩壊の危機)で行き詰まったわけで・・・。

英国の過去の思想的遺産にも疎く、今自分が生きてる時代の文化が読めないというもどかしさ。どこまで行っても、空振り続き。それ以降、私の中には、拭い難くも陰鬱と暗愁とが巣くうこととなったわけで・・・それは、私側の思想的未熟さは否定し難いとして、彼女の側の方法論的な不手際が云々されてしかるべきとの見方も出来るだろうが、両者が齟齬をきたしたところの本当の理由というものが意外なところにあつたのではなかったのかと俄然悟ったのは、先日の『日経新聞』に掲載された、フランス文学者の小林康夫・東京大学助教授が「伝記ラッシュ」の背景を解説したところの記事が契機であった。彼に拠れば、フランスの現代思想は、個人の意識や生にすべてを還元することをはっきりと否定したと定義される。我々の現実が、実は個人の意識そして個人の生を圧倒的に超えたものによって統御されていることを、いわゆる《構造主義》がはっきり示したこと。つまりそこでは個の生を超えるもの、そして歴史を超えるものの次元が探究されていたこと。そこから、

こうした‘生の語り’の企ては、今世紀がもたらした人間についての認識を知った上で、一人ひとり異なったこの生をどのように生きるかという問いに収斂されること。そして一人ひとりの人間が自分の特異性に応じて自らの小さなモラルを確立しなければならない時代に突入していることを指摘する。そして、こうした「伝記ラッシュ」を、無数の異なったモラルの共存という不思議な時代の先駆けと総括している。そうだ、彼の言うところの「個のモラル」模索というところに人は戻ってきて初めて「私」になれる(地に足が着く)というものだ。私は、私がどういう私になるのか、それが飽くまでも私に任せられねばならないという‘自由’を主張したわけで、その結果が、彼らの誇る‘砦’の外に捨て置かれることであっても、それは致し方ないとまで悲愴な覚悟を固めざるを得ないような、まさに私にとっては闘いであつたわけで…。今にして、それをやはり間違っただけではなかったとを感じる。

私は、むしろ「普通の人」の感覚で生きていたい。‘超人’などなりたくもない。肌寒いだけだ。その行き着く先は、虚無・ニヒリズム(私は誰でもない、何でもない!)しかないと思われるから…。そこに私の限界を認め、その限界をこれからも分析家としての‘節度・節操’として、私は踏み留まるだろうという気がする。究極には、私は「私」を生きたいのであり、あなたは「あなた」を生きられたらと願うことでしかない! 小林康夫氏の言うところの<自分たちが生きたものを、そして自分たちの生のフォルムをはっきりと確定し、定着すること。つまりは、生を書きなおすこと>とは、即ち私が帰国後『精神分析』の名の下に擁護してきたもの、まさにそれではなかったのか!

※1993年7月12日(月曜日);

《覚醒夢(7月10日・朝方): 男が、草ぼうぼうの土所に立っている。鎌を片手にして、雑草をムンズと掴み、引き剥がす。裸の土壌。これからそこを耕し、鍬入れするらしい。その後は、種蒔きが予想された。》

◆考察; 7月9日(金曜日)の午後、「渋谷区中央図書館」で何冊か本を借りる。その中の1冊が『西田幾多郎の書』。そこに掲載されてあつた彼の娘・静子宛なる手紙の写しを見て、痛く感動する。「父性愛」に触れた思い。たぶんそれに触発されたのだろう。時折夢の中に、このように園芸に関連して男が登場し、私を喜ばす。まずは第一に連想されるのは、Dr.メルツァーだが。それは彼の私宛への手紙の中で、私の仕事が万事うまくゆくようにとの言葉として<あなたの‘フィールド’で…>という英語が使われていたから。父性愛への充たされない飢餓感故であつたろうか、概して男性に対して(それも師と呼ぶべきはずの人に対して)臆病というか、妙な気後れがあり(それは気恥ずかしさでもあるが)、結局はよそよそしい関係のままに離れてしまうということが繰り返されているようだ。淋しい限りだ。それは父に自分を投影したかたちでの理解にもなるのだが、ああ自分を淋しい人にしてはいけない! としみじみ思う。余裕がないために、親しさを示すことを怠り、疎遠なままに、人を使い捨てしてきたのではないか。その余裕のなさとは、即ち私の心の偏狭さを顕すものでしかない、内心忸怩たる思いがある。

※1993年9月20日；

《夢：草原。馬が走っている。男の子らの群れ。黒みがかった干し柿（藁で結ばれている）を空中に投げて飛ばし、それを追い掛ける。小競り合いやらでスッタモンダ。それを私が掴む。男の子らを振り切って逃げる。その際身近にいた男の子に、振り返りざまにその柿の一つを手渡す。（気前良くしてあげたことが得意??）・・・そのまま馬を追う。大柄で太った男の姿が、横合いから邪魔だてするような恰好で、眼前に立ちはだかる。それを避けて、尚も前進する。山登りの人たちの利用するとある小さな駅に辿り着く。『三条駅』とある。小さな路地へ馬を連れて入る。ようやく辿り着いた感あり。そこは中国の片田舎といった慎ましい雰囲気、若い駅員が一人。ああお金がなくとも、こういう生活もいいなあと思ってる。》

◆連想：ムツゴロウ（畑正憲）さんが蒙古草原での馬レースに挑み、20キロメートルを完走したという実況放映を見たことが夢材料か。最初どこかに目的地があったような気がするのだが、あとで辿り着いたところを見ると、それがそうだったという印象でもなくて、むしろ予想外な（見知らぬ土地に）辿り着いているのが妙だ。（三条→山上??）覇気は勿論欲しいが、でも肩肘張った闘争的な気分ではなくて、何か充足した穏やかで慎ましい気分で生きられたらいいなあと思う。

◆考察その1：R.D.レイン著『引き裂かれた自己』を読んで・・・既存の精神医学を超えた意表をつく弱冠28歳の著作。誰かの‘いい子’である（なりたい）の願望を放棄した位置（‘異邦人’の視角）から見た世界というものがここにある。そんなことを強烈に思い知らされた気がする。秩序・調和・序列などクソ食らえ！の世界。見たくないものは見えないもの、見たいようにしか見ないといった甘えをかなぐり捨ててこそ見える真実。相手に見られている自分が自分だということを敢然と拒否し、それを受け入れることを欺瞞として弾劾する姿勢。‘私生児的アナーキスト’がここにも一人いたということ。しかし、ここで問題視されることは、己が放擲したものによって、報復（しっぺ返し）を食らうという宿命的な帰結。自らの辛辣さにおいて自らが裁かれ、断罪されるという筋書。誰もそれを免れはしないということ。それも煎じ詰めれば、彼の言うところの「NOBODY（誰でもない人）」→ノー・ボデイ（からだが無い）になる外はないということか??

憶うに、私が、父親の中に‘父性愛’を、母親の中に‘母性愛’を信じられたからこそ、斯く私は生きられたのではなかったか。振り返ると、（親である以上）私を理解し、言うことを聞いてくれるはず。最善を尽くして援助してくれるはずといった、私の自己本位で身勝手な思い込みの中に彼らを抱き込んできたわけで・・・当時の現状からして、私の夢の実現にどんな保証があったかと言えば、むしろ否定的で・・・そこ止まりで諦めなかった私も強欲だが、今ここに至っては、彼らの中の未熟な父性・未熟な母性が、私の我が儘（助けてくれるはず、助けてくれねばならないはず！）に嵌められてゆく中で、現実的に開拓・啓蒙されていったのではなかったかと。決して不遜ではなく、そう見れば見える向きが事実としてある。そして、それぞれが大なる代償を払ったおかげで、またそれ故にそれぞれが十分に報われて、今の運命を生きられることは掛け替えのない、実に有り難いこと。

◆考察その3:ひょいと思ひ浮かんだことがある。私はメラニー・クラインのようにエキセントリックでも野心家でもないということだ！ 極めて常識的で普通感覚を大切にすること。彼女のように生活の糧を得るべく、是が非でも己のテリトリーを獲得せんがために、フロイトの跡を引き継いで、我こそと「無意識」の解明に挑む野心家の一人として名乗りを上げ、あわよば新発見を携えて、先陣争いに勝利を収めんと欲するようながむしやらさとは縁遠い。確かに彼女の、特に児童のこれ迄光の当たることのない心臓の動きに関するパイオニア的な業績については高く買うとして、その勇猛果敢さが彼女の真骨頂であるのは否めないとして、概して過去・現在が究極にはすべてひたすら罪悪感へと収斂されるべく、言わばなりふりかまわずの‘弾劾’と化してはいないか(その徹底さにおいて‘魔女狩り’を彷彿とさせると言えば、語弊があろうが・・)。そこには明らかに「未来志向」(即ち主体がどのような自分として自分を選び、かつ位置付けんとしているか)が盲点となっている。

ここで、本出祐之先生との或る会話が想起された。それは、私がハンナ・シーガル(メラニー・クラインの直弟子)の本を読んで、彼女のメラニー・クラインに関する個人的描写が極めて平坦かつ表層的であると言ったら、彼が、<それは十分な距離を持ち得ていないからだなあ>と言ったのである。そう言えば、ロンドンに滞在中、誰かが誰かをどう言ってるとかのいわゆるゴシップなり陰口などから、私自身は遠い所に身を置いていたような気はするのだが。でも彼女をエキセントリックだ(普通感覚に欠けている)とか誰かが言ってる(思ってる)など、私の頭で考えるなど到底想像もできなかったわけで・・。昨日姉と話していて、小此木先生が‘フロイトそっくりさん’ やってるとか、斎藤久美子先生のことを‘入り口・出口のたくさんある人’ だと言ってみたり、こんな風に私が誰其は～～だと考える(口に出して言える)ようになったのは、つい最近のことではない(！？)。同時に、私は誰其とはどう違うか(例:私には普通感覚が大事。メラニー・クラインにはそれが欠けている)といった比較対照が出来てきたのも驚きだ！ こうして自分の輪郭・誰其の輪郭をクッキリ把握せんとしている。まさに眼のないダルマに眼が入ったような、これは‘開眼’と言えるのではなからうか！

■2000年代頃:〔フロッピーに保存された夢の記録。そこからごく一部を抜粋し掲載する。〕

【解説】;夢を記録するというより、むしろそれに関連して折節の感興を綴ることが多くなる。内省力の深まり。自分に反撥したり、自分を諭したり・・。夢想が活気づく。心の纏れた糸が解かれてゆくみたいに。疎外感やら、殊に恨みがましさが幾らか払拭されてゆくような。だが、まだまだ‘我執の虜’。延々と言葉でもって我が身に闘いを挑んでゆく。あり得ない、あるはずもない、でもそうあってもいいかもしれないとやら、ホンネが吐露される。見えてきた自分。更には、気に入らないと自分にイチャモン付ける。それで軌道修正もありといったこと。やがて、ぶれまくっていた自分が幾らかぶれなくなってくる。腰が据わってきた。すなわち、専ら内なる自己啓示に耳を傾け、そして‘想念’を紡ぐ。やがて、夢が‘希望’を語れるようになってゆく。

※2006年10月5日；

◆考察；「ところが形(フォルム)を持つ」とは、つまりはこういう具合なんだなあって、改めて夢の不思議を思う。心の中の有象無象がせめぎ合いひしめき合っている。散り散りばらばらのイメージ(表象)の断片、曖昧模糊としたまま浮遊しているかの如く。それがいつか時間を経て、さらなる表象の断片が寄せ集められ、言うなれば‘私なるもの’に従属して、そう確かにジグソーパズルみたいに、あちこち幾つか焦点が結ばれ、像が凝集力もしくは結晶化をいや増してゆく。そして、それは予期せざる瞬時、突如として心に捉えられる。つまり‘見えてくる’。これがいわゆる‘覚’なるものかしらね。それは弛緩することもあるが、加速化もある。その違いは実に興味深い、とにもかくにも、斯くして意識が(無意識も又！)倦まず弛まず動いている(働いている！)と知ることは、実に慰めだ。

◆課題；意識の働きには、それぞれ固有の流れがある。(‘中核’になるものとは何だろうか→この核を‘贖い’としてはダメかしら？) 何が起きているのか、そして何の為に、何故に？私がいかなる飢餓(欠乏)を生きているのか。だとして、それは、どこでいかにして何によって充足されるのか。その牽引力とは・・・？ ビオンというところの「reverie(夢想)」との関連は・・・？！

◆追記；夢なるものが、イメージのタペストリー(織物)・イマジネーションの編み物だとして。ただそのようなフォルムを有するべく、いかなる‘必然’があるのか？すなわち、ビオンというところの(ベーター要素がアルファ要素に変換される)「アルファ機能」とは果たしてどのような‘必然性’を持ち得るといえようか？個なるもの、すなわち‘私なるもの’という意味に於いてだが・・・。偶然でもなく恣意的でもなくて、それが飽くまでもその人‘固有’の自律的営みだとしたら、そこに‘覚’ばかりではなく、‘覚’を超越する‘願’が内在しているのではないかしら。

※2006年11月16日；

《夢：午前中に私が誰か男の子を連れて出掛けるらしい。遊園地かな。(自分の子どもではなく、誰か他人の子どもなのは確かだが・・・)教室のようなところ。幾人か母親たちがいる。それで、お弁当におにぎりを作っている。手のひらにご飯を盛り、その中に何かお惣菜のようなものを詰め込む。握る。そのうち、他の皆も一緒におにぎり作りに加わる。お櫃の中のご飯が底を付く。＜あら、ご飯が無い＞と言う。皆の家はまだご飯が残っているということで一安心。廊下に母子の連れが居る。彼らも明日出掛けるんだとか。お天気は大丈夫かしらねと、新聞の一面を開いて、明日の天気予報を確かめる。

◆連想；昨日、作家「李恢成」の小説『百年の旅人たち』を上下巻とも読破。感動した！＜人は人によって生かされてる＞ってこと。我が家での盲点だったかも。あまりにも自立心が堅固で、己一人という意識が強い。誰の世話にもならず生きていくつもりになってたかな。強制連行された元工夫の朱斗洪(チュトウホン)という人物にも似て。グループホームに居る母親の姿を見ながら思う。ああ、いつか自分も老いて、人に世話になる。慌てず騒がず、誰をも恨まずして、その現実を受け入れることが出来たらいい。そのためにも今見るべきものをしかと見ておこう。

◆追記；おにぎりのあったかい感じ。互いの気遣い。それぞれの人生への思い遣り。出逢いがあり、別離があり、それで果たして今後どのような絆を、誰と私は生きるのかしら？「契りの精神」という言葉があったが。誰かとの契りを自分が胸深く抱いて生きていくといった感覚はいい！

◆後記;ふと思った。来るべき講演についてだが。今この会場に居る誰かに語るのではなく、50年先100年先の誰かに語るつもりで語ろうと…。誰かに何かを私の言葉を遺したい。50年後100年後の誰かさんが私を継いでくれるのを祈って…。これって、幾らか屈折した感覚かなとも思うけど。しかし、日本に於ける「精神分析」の先行きが見えない。今やジリ貧状態というのが否めない。だけど改めて思うに、『百年の旅人たち』の朱斗洪のくわが倍達民族は今‘告白’から始めるべきだ…>という言葉は説得力がある。これこそが李恢成の小説家としての立脚点であろうが…。そして実に、これこそがまた我が「精神分析の命題」であるのだ。この‘声’を聞いた。大いなる励ました。

※2006年11月29日;

◆考察;私の夢って、凄いわあ。イメージ(表象)がてんでにバラバラなのに、すべてが気分で繋がっている!イメージにエネルギーを充当しつつ、次々に伝染(伝達)経路を拡げてゆく。まるで火薬庫に飛び火するみたいに。凄まじい拡がりと伸びだ。これが即ち、「思考の展開」の経路かしら。これは現実の行為を決定づけるべく、その‘下敷き’となるもの。ピオンは哲学に‘emotion(情動)’を導入した最初の人として今世紀の哲学者の最大の一人だと言ったのはジョン・ブレンナーだったが。かくして、内なる情動的経験の脈絡づけられたフォルムがいわゆる「思考」であり、脈絡づけに失敗した、もしくは未完成なのが「行為化(アクティング・アウト)」なるものかしら。私がしばしば見るところの「支離滅裂な夢」だって、おそらくそうしたものに違ひなからう。ちょっとは判った気がしてきたわ。

※2006年12月22日(金曜日);

《夢;暗い。表参道のような広々とした車道の脇の広い歩道を一人ぼつんと私が歩いている。何かの帰りで帰宅途中なのか。道路わきに洒落た店舗があるようだ。カフェがあり、中が明るいので入ってみる。人がいて賑わっている。ボーイさんがカウンターにいる。ガラスケースの中に美味しそうなパン菓子がいっぱい詰まれている。誘惑を覚えるものの、どうやらお茶だけにしてみたいで、カフェを出る。遙か遠くに灯りが見える。そこが自分の行き先らしいのだが、途中が完全に真っ暗。徒歩を考えるとちょっと怯む。やはり元来た道を引き返し、バスに乗った方がいいと思い直す。それからふと、傘を置き忘れたと思う。慌ててカフェに引き返す。とにかく暗い。そのまま中に入って、高い丸テーブルに引っ掛けておいたはずだと記憶を辿り、暗闇の中に見当を付けて手を伸ばすと、やっぱりあった!黒い長い柄付きの傘。それから外に出た途端、自分が被っていたはずの毛糸で編んだ帽子がぬげてしまっただけなのに気づき、慌ててそこら辺りの路上に落ちていないかと思渡すと、あった!拾う。

何だか歩いているうちに、周りが昼間のように明るくなっている。庭園らしき趣きあり。傍らに背の低いブッシュがあり、ブルーベリーやらの木々が植えてある。ブルーベリーの実が熟れているのを見て、ちょっと摘む。他にもあまりよくは知らないが実が生っているのを摘んで口に入れる。お腹を壊さないといいがと一瞬思う。…近くに英国人らしき人々が散策しているみたい。ふと見ると、バラが丈の高い柵にいっぱい蔓を這わせ、花を咲かせている。不思議にもまるでアコーディオンカーテンのように、それは開いた。覗いてみると、そのバラのカーテンの中には書棚があった。上の段には本がいっぱい並んでいる。総てが英語。「イングリッシュ・ローズ」の園芸書とか、他にも児童書やら、雑多だがいろいろ並べてあつ

た。下の段には、いっぱい子どものお菓子。食べかけの菓子袋やら風船ガムなどが置かれてある。そこで一つキャラメルを摘まむ。乳白色でマシュマロみたいに軟らかい。口に入れると美味しかった。

◆考察；目覚めてすぐに、「メルツァー」の続きを読まなくてはと、ふと思う。昨夕「ウォルト・ホイットマン」の詩集『草の葉』を読んでた。少しずつアメリカ的なものに馴染み始めている。歯が立たないのではなくて、賞味することが出来たらと思うのだが。少々の食中りにもめげず、食べ慣れてゆくしかない。食わず嫌いよりも、おもしろい！と思うことなのだ。

分析家としての自分のゴールが「贖いの器」だとして、ここでもう一度引き返して、原点に戻って、精神分析を洗い直したい。「フロイト」を読む。ここで「マルト・ロベール」(フランスの女流評論家)がとてもいい助っ人になってくれた。〔彼女には、『精神分析革命』・『起源の小説と小説の起源』・『エディプスからモーセへ』など著書多数あり。〕これはメッケモノだ。(マルト・ロベール→マシュマロ!) 謎解きのおもしろさ、まるで「秘密の花園」に迷い込んだみたいなの。知っていたと言えば知っていたけれども…。改めてホオッホオッ！だわ。

さらには、柄付きの傘だが、その連想としてふいにモーゼが手にしていた‘杖’が浮かんた。それを暗がりの中で我が手に掴んだということは、どこかく付き従ってゆける！>という‘内なる声’に出逢えたみたいなの気分だ。モーセ＝フロイトという意味合いだが…。今や自分が、この長い歳月忘却し、顧みなかったものを改めて見出し、拾い直す、そんな時期によく至つたらしい。

さて、「秘密の花園」のバラのカーテンだが、今週の火曜そして水曜日に起こった出来事と関連している。火曜日に年金の受給資格の件で「渋谷市役所」を、さらには「社会保険事務所」を訪れ、受給の手続きを。そこで何気なしに職歴として1971年に一年間だけ京都市の職員であった旨を口にしたら、意外にも、それは「共済組合」に加入していたことになると言われ、それが証明されるならば、私の年金受給額が少しなりとも今よりは上がる可能性があると言われたが、まるで気乗りせず。まさか、そんな昔の記録が残っているはずもないと思う。でも夜ふと気掛かりになって、まずはこっそりネットで『京都市若杉学園』を検索した。まあ、出てきたのだ。えっ、あるんだあ！と信じられないものを見る気分。掲載されてあった若杉学園の玄関先の写真に見覚えがある。京都駅の裏手にあるのだが。帰国後一度も訪れていない。その「母子通園部」にプレイセラピストとして勤務し、たったの一年ほどでさっさと辞めて、ちゃっかりお餞別やら退職金やらを貰ってイギリスへ行っちゃったわけだから、後ろめたい限りなのだ。で、あれっ、もしかしてと思い立ち、翌日の水曜日に京都市市役所に問い合わせしたら、まあなんと記録が確かにあったとの返事あり。不思議な感覚だった。つまりは「我がまま娘」でゴメンなさいってことだけど。要するに、私って「眠りの森の美女」のメルヘンの中の‘眠り姫’だわさって、改めて自分に呆れた。で、‘眠りの城’を覆い尽くすバラの茨を突き破って‘眠り姫’を眠りから蘇らせた王子様って、あれっ、誰だったのかしら！？私の場合ということだけど…。

※2007年2月21日；

《夢；映画館の中。待合ホールがあり、赤い絨毯が敷かれてあって、ソファが置いてあり、開演間近らしい。人の姿がちらほら。そのうち、そろそろらしく、劇場の中へ。ちょっと遅れたかな？人々が既に席を確保している。前の席だけが空いている。どうにかスクリーンの真ん前に席を見つけ、座る。まるで仰向

けになってスクリーンを見上げるような恰好。目の前のスクリーンに青い海の映像が映し出される。

◆連想; あらあら、ちょっと新鮮というか。映画館に行くなどはまったく久しぶり。つまり「皆と一緒に」に何かするということが。で、ちょっと遅れたけど、皆と並ぼうとしている。一緒に学ぼうとしている！ってことじゃないかしらって朝方思った。仰向けの恰好って、(分析の)寝椅子みたいだ。Self-analysisに突入かな？ここに至って、どうにか自分の‘深層(深海)’へ潜るだけの力量が備わってきたということか？まだまだおっかなびっくりだけどね。先日のTV番組「プラネット・アース」でレポート役の俳優「緒形拳」が潜航艇に乗り入れ、深海に潜る際に、<緊張してます>と言ってたが・・。

近々「岩波ホール」で封切りされ、ぜひ見に行こうと思っている映画の書評が昨日の朝日新聞に掲載されてあったので切り抜きしておいた。『約束の旅路』というイスラエルの映画。その書評の中でミハイリアニウ監督の<・・ユダヤの教えでは、他者に歩み寄ることによって、一人前の人間になるとされる>という件があったが、これは私をちょっとチクツと刺した。文脈は異なるにしても、いつでも我流をやってもいけない。後から来た者・遅れて来た者として、ここで謙虚になって、先達の跡を辿ってみようと思った。そうした己への‘諭し’の呼びかけがこの夢には確かにある。夢が「narrative structure」である、とメルツァーは言う。この‘narrative’とは語りということだが、誰が誰に語り掛けているのかを考えていた。この夢で、<もう恐れなくてもいい。そろそろいいんじゃないの？>と私は私に語っている！！夢に内在する‘emotional conflicts’とは、turmoil動揺もしくは chaos混沌(つまりは、it does not make sense)としたら、私が意味を持たないということ、すなわち非存在の謂い。これは「己への背き」とも言い換えられる。それがmeaningに至るとしたら、それは、私が意味を持つ(it does make sense)という意味合いにおいて「己への立ち還り」ということに他ならない。私が私になる。つまり己が‘名を呼ばれるもの’に、‘贖われるもの’になるということ。夢のプロセスとは、‘a theatre of generating of meaning’なのだと言っている。それは、‘narrative structure (call & response)’を前提としてある。かくして、非存在は存在へと転換する。夢とは、そのような「贖いの業」なのだということになりはしないか！！

■2010年代頃: [パソコンに保存されてあった夢の記録。そこからごく一部を抜粋し掲載する。]
【解説】; 夢が‘ダイアローグ(語らい)’になってゆく。自分の想念を論理づける。言うなれば、「イメージ思考(ミュートス)」から「概念思考(ロゴス)」への変換作業。自分の中に「羅針盤」が定まってゆく。どこへ自分に行く？何をめざして？自分という本来性(‘私なるもの’)が見えてきた。非本来性と突き合わせ、それと一線を分かちながら。‘私なるもの’の言葉が自律性を有してゆく。己の‘立ち位置’やら‘立ち還る場’を見極めんとして。斯くて己の‘内面’が実在性を獲得してゆく。たとえ‘暴れ嵐’の如く、わが想念がどれほど狂おしく乱舞しようとも、手繰り寄せると‘私なるもの’に繋がっている。この‘手綱(自己意識)’の感触を握って離すまい。

※2014年1月2日;

《夢その1: 水の中。まともに攻撃するのではなく、後方から攻撃する体勢。身を翻す。「逆転勝訴」

か？まだまだこれからというわけだわ！臆病な自分がもはや守りでもない、攻めに転身しようとしているのかしら？そうだといいが・・・。》

《夢その2：家に戻った。女がいる。病院に見舞いに行くことを頼まれる。見舞いの品に交通費で合計2万円ぐらいは掛かるという見積り。知らないところに行くのもいいかと考えている。見舞いに何を選ぶか。どうやら『京王百貨店』の屋上の園芸コーナーで、花やら枝ものやらを物色しているようだ。購入したものをどうやって自分のところに持ち帰るのやら。「移植」という言葉、それに枝がしっかりと根を藁で包まれているイメージ。大丈夫だろう。頼もしい。さて、どこへ移されるやら・・・。

◆感想：あちらのものの翻訳がこちらの人にどうにかうまく手渡されるといいが・・・。怖じ気づいてる場合ではない。「移植する木の枝」とは、私だ。そろそろ自分の足元が固まってゆく感じが嬉しい。

◆追記：思いがけなく梶川和行さんから年賀状が届いていた。京都での講演が想起されたのだろうか。どこかで種蒔きをしたのが、誰かの中で芽生えているといいが・・・。「種蒔き」或いは「植樹」というイメージ。皆で「植樹祭」をやろうではないかといった気分。悪くないかな。

※2014年1月4日；

《連想；ふと今朝目覚めて思ったことは、<あら、心が動く、体が動く>ということだ。ずっと手が出ているという感覚。倉庫から過去の臨床ファイルを取り出すなどはまだ先だと思ってたし、ここ30年余りもそのまま放っておいたわけだが。昨日来、まずは倉庫から取り出した<Journal of Child Psychotherapy>の整理から始めて、今日幾つか重要と思われる文献をコピーした。いずれ翻訳して私のWEBサイトのホームページにアップロードするつもり。さらには、そのついでに今日はさっさと臨床ファイルまで取り出した。真夜中、まだお正月休み中なのだろう。通路には誰の姿もない。段ボール箱をあちこちいっぱいに取り散らかして、結構な力仕事だ。やれやれ、そろそろ本気で取り掛からなくては。時遅しとならぬように。自分のからだに訊いていた、まだ大丈夫かと・・・。

何かしら、目に見えないバリアーがあったのか。それが今ここに至って、ブレイク・スルーした(突き抜けた)というのならばいい。幸先のいい徴候だろう。心の強張りが何かしら解けてゆくような・・・。何も座禅をしなくても、こんなふうにく心が動く、体が動く>としたら。この無念無想の中で働く自分が「覚」というものだろうから・・・。それに従っていればいいということに落ち着く。「自ずから」に身を任せればいいのだ。「自発自転」という言葉通りではないか！

或る種特別な‘因縁’を生きている自分なのであろう。自分は何をされた。自分は何をした。彼らに今更恨み言を言うことでもない。何かを手渡されたということだろう。皆それぞれに自分の生を賭している。それだけの意味が「精神分析」にあるということだろう。無碍に疎かにすべきでもない。

昨日は、スーザン・アイザックスの1952年の論文「空想の性質と機能(The nature and function of Phantasy)」を読んでいて、よくいろんなものを見ているんだなって、子どもの観察から導かれた知見には改めて驚いた。今私が考えていることに通低するものがあるのが嬉しい。皆誰もが承知しているだろうことを、今遅ればせながら、私は感心して読んでいるのだから可笑しくなる。》

※2017年7月18日；

《夢；芝生にシートを広げて、そこに座っているようだ。ローソクを手にはしている。点火してある。そしてもう一つの点火していないローソクに点火して、誰かに手渡そうとしているようだ。誰かという誰かがそこに居たわけではないが・・・自分が落ち着いて、その動作をしている。》

◆考察；背景になるのは、昨日見た代々木公園の光景。芝生にシートをひろげて、そこで団欒している人々やらジョギングする人もいた。「東京オリンピック 2020」という垂れ幕が目に入った。そこから「牽引車」という言葉が頭に浮かんだ。「聖火リレー」、すなわち‘法灯を継ぐ’ということ。「パイオニア」になるということ。だけど、そもそもパイオニアとは群を率いる人を言うのだろう。自分の場合は、とにかく自分で解らないことが解れば良いといったことでしかないし、それはどうにも今でも変わらない。誰にも解られなくとも自分一人が解れば良いというのは、結構それはそれでいいけれども。「それでいい！」が時には揺らぐ。すると、変わり者で拗ねモノでといったことになりかねない。自分の立ち位置こそが眼目。誰との比較でもなからうが。でも僻まないでいるはずが、誰も羨ましいわけでもないのに、気持ちが揺れることがある。姉のところの猫のチツチの話から、皆、家族しているんだなあ、いいなあって思ったり。自分が一人ということがやはりね。ナイといっても、べたべたまわりつくペットなら、その気になれば飼えるわけで・・・改めて自分が「牽引車」であるということ。それで付いて来る者しか用がない、という姿勢を貫くことしかなからう。独り善がりの一人合点ということでもなからう。だが、そうなのかも知れないという一抹の不安あり。そうだとすると、ここに至って、後戻りもない。どこへも行けはしない。

だが、それよりも、自分の中に時折訪れてくれる「言葉たち」がまだありそうだ。今日の「牽引車」もそうだが。それに希望をつなげてゆけしがあるまい。すなわち、自分の中の「死の衝動」、すなわち「滅びへの傾斜」に拮抗するものを探し求めてゆくこと。その徹底抗戦、即ち自分に油断しないということ。「言葉ありき！」への信(faith)こそが最大の武器。ほんとに＜頼みます！＞の一言。

◆追記；改めて不思議に想う。分析セッションの中で、またこうした日誌にしてもだが、その都度折々に私が語る‘言葉たち’が一体どこから来てるのかと。そして、ああ、そう言えばと思い当たる。夢と現は地続きなのだ。日中目覚めながらも夢の余韻というか気分を引き摺っていて、その延長上に観念化されたものが言葉として出てくるようだ。例えば、昨日の夢言語から引用すれば、「花咲かせている」→笑顔が戻ってきた、「横並びの花たち」→手をつなぐ感覚、「ハーモニカ」→ハーモニー→思い遣り・寄り添うといった具合に・・・やれやれ危ない綱渡りだわ。自分の立ち位置、自分の向き加減が判る。辛うじて危なっかしさを免れている。ちょっと油断して気を緩めたら、隙を衝かれる。つまり内的葛藤がもろに外へ漏れ出てしまう。それで外的相克・摩擦へと飛び火する。こうして絶えず‘覚めていなくてはならない’心の状態というのは、精神分析家の宿命か？！

■おわりに；斯くて私は、過ぎし日の夢日記の抜粋から道筋を辿り、そこに＜自証的覚知＞の展開してゆく軌跡を素描した。そこには一貫して‘私なるもの’の回復が希求されている。「自己告白」とも言えよう。日々の臨床に携わりながら、いつしかそれが分析セッションのプロセスの展開と軌を一にするとの自己了解に至った。《心の言葉、‘個’を謳う》ということ。この学びを所以とし、＜自証的覚知＞をわが精神分析の基軸に据えたく想う。(2020/05/05 記)